

能代高

⑬

うるわしき師弟

金谷雄二（8期、喫茶店みむら）は、その夜、涙がとめどもなく流れた。自分を、こんなにまで思ってくれる先生がいるなんて……。

あの日、金谷はすっかり観念して教員室に行った。

「放課後、宮脇（時太郎）教官のところへ来ること」

小使いさんからメモを手渡された時、覚悟はできていた。身に覚えがあった。

「とうとう、宮脇教官にやられるのが」

級友も「やられる」ことを疑わなかった。校長以上に権威があり、厳しいこと天下一の配属

将校からの呼出し。まともでは帰してくれるはずはなかった。

ところが意外だった。宮脇教官はこういった。

「金谷、お前、一番仲のいい友だちだれた？」

いきなり説教されると思い込んでいた金谷は、いぶかりつつ

「福岡さんだす……」

先輩の福岡和八（7期、故人）は、バレー部で活躍した。家が近所で、親友の間柄だった。

「おお福岡か。今晚、福岡と一緒にオレの家へ来い」

こうして金谷は、福岡を介添役にして宮脇教官宅へ行く。そこで、生涯忘れられない感動的なシーンに出あうのだが……。

こんなことになったのも、もとをたたせば、柔道部室で起こったボヤ騒ぎ。火のないところには煙はたたず。生徒のたばこが原因だった。



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）

「いいか、みなポケットをみせろ」

三年生以上のポケット検査が不意に行われた。何人かのポケットから、たばこのくずがこぼれ落ちた。金谷のポケットからも。金谷は、家でちよつとしたずらした時の「名残」だが、事情はどうあれ、生徒がたばこを吸っていたとわかれば、無条件で停学、放校などの処分。

「ああ、オレも、これでしまいか」

金谷は、全身の力が抜けた。さて、「来い」といわれて行った宮脇教官宅で――

二人は正座。フスマをあけて入って来た宮脇教官、福岡の目の前にボンと何かを投げた。

「えっ!」

金谷は、一瞬、自分の耳と目を疑った。あの宮脇教官が、まさか中学生にたばこを吸えなん

ていうわけがない。吸えといわれて吸い出す先輩も先輩……。

福岡が「一服」したあたりで宮脇教官がしんみりと

「実はな。オレも、中学三年でたばこを覚えた……。中学を出て「陸士」に入つて、絶対に吸わなくなつたが……」

その晩、金谷は山盛りの菓子をごちそうされた。宮脇教官はついに、説教のセの字も口になかった。

「なんてまあ、すばらしい先生でねか」

「まったく。人格者だな」
宮脇教官こそ、本当の「先生」だと、若い二人は思った。

「あの時、小竹（寛治）先生も、キミのこと、ものすごくかばつてくれたよ」

卒業後三十年もたった同窓会で、太田口政治先生がいった。「ああ、そうであつたか……」

「たばこ事件」で、処分らしい処分を受けないですんだワケが金谷はやつとわかつた。小竹先生は、五年間、金谷の担任だった。

「もしも、小竹先生たちがかばつてくれねがつたら、オレの人生も別の方向さ行つていただかもしれないね。ああ、先生はありがてもんだ」

金谷は、いくら感謝してもしきれないと思つてゐる。

金谷と同期の8期生は、スポーツで、めざましい活躍ぶり。常勝・秋田師範を破つて全県優勝したのが能登薫（能久社長）田口真一（能代高校）らの陸上部。応援団長は能登義夫（東北木材社長）だった。

「発揮会」――8期生にちなんでつけた同期会の名。毎月八日「みむら」幹事会。毎年八月、能代で同期会。戦後一度も欠か

さない。

会長、平沢康司（能代商業高校）会計、塚本栄司（能代商工会議所事務局長）。慰霊祭を白竜寺で行う。同寺の長男である藤沢慧など同期の二十人近くが戦場に散つた……。

忘れ得ぬ宮脇教官は、十年ほど前亡くなった。大塚喜蔵（木材会社社長）が伊豆に訪ねたのが最後になった。小竹先生は、新潟県糸魚川市で健在。十月三日には、母校創立五十周年式典がある。金谷たちは、先生に半紙を書いた。

「ごども、かならず来てもらいたい……」と。（敬称略）

